

東ティモール～フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅～

2010年8月28日～9月5日

報告集



特定非営利活動法人 パルシック

2010年度パルシック東ティモールツアースケジュール

日付		行程	宿泊地
8月28日（土）	AM	成田発	デンパサール
	PM	デンパサール着	Mastapa Garden Hotel
8月29日（日）	AM	デンパサール発	
	PM	ディリ着 パルシック事務所にてオリエンテーション	ディリ Hotel Audian
8月30日（月）	AM	市内観光/ホテルにて勉強会	マウベシ
	PM	移動：ディリ⇒マウベシ	Hotel Pousada
8月31日（火）	AM	市場で買い物 移動：マウベシ⇒ロビボ集落	
	PM	歓迎会/インタビュー 映画BALIBO鑑賞	ロビボ 民泊
9月1日（水）	AM/PM	コーヒー収穫、加工の手伝い 日本の文化紹介	ロビボ 民泊
	AM	コーヒー収穫、加工の手伝い ロビボ集落にてお別れ会	
9月2日（木）	PM	移動：ロビボ集落⇒マウベシ マウベシ事務所にて振り返り会	マウベシ Hotel Pousada
	AM	移動：マウベシ⇒ディリ	
9月3日（金）	PM	ファブラス・ファンデーション訪問 市内観光 ホテルにて意見交換会	ディリ Hotel Audian
	AM	コーヒー加工場見学	
9月4日（土）	PM	ディリ発/デンパサール着 自由行動 デンパサール発	機内泊
	AM	成田着	



【参加者/スタッフ】

〔後列〕 毛利、熊谷（明）、森、斉藤、越田

〔中後列〕 栗栖、高木、阿部、吉武、熊谷（有）、八木田、當舎

〔中前列〕 荒井、小鳥居、藤井

〔前列〕 石井、福原、辰野、結縄

（敬称略）

* 東ティモールの方の中にはお名前が不詳の方もいらしたので、省略させていただきました。申し訳ありません。

ほっかいどうピーストレードから 5名

明星大学から 6名

パルシックへの直接参加 6名

東ティモールコーヒー生産者を訪ねる旅

パルシクの東ティモールツアーが行われたのは、2008年以来、2年ぶりでした。今年は、17名という多くの参加者の方々とともに、今年コカマウに参加したばかりの新しい集落、ロビボ集落を訪れました。

北は北海道から南は長崎まで、各地から集まった参加者の方々が全員で顔を合わせたのは、経由地のバリのホテル。飛行機の乗り継ぎのため、バリで一泊してから、皆で東ティモールの首都、ディリに向かいました。ディリ到着後は、パルシク事務所での活動紹介、ディリ市内の観光や、東ティモール独立運動に関わった方からのお話を伺う会などで1日を過ごし、コーヒー生産地、マウベシに出発。ディリを出るのが少し遅くなったため、4時間後、マウベシに着いた時には既に夜で、コーヒーの木が茂る山道を抜け、遠くに町の光が見えてきたときには、ホッとしました。海に近く常に蒸し暑いディリと違い、標高約1,500メートルのマウベシの夜は、上着がないと鳥肌が立つ寒さです。暗くなってしまったので、急いでレストランで夕食を済ませ、次の日に備えて休みました。



ロビボ集落へ向かう朝、早速「ティモール時間」に遭遇します。事務所の前でロビボへ向かう車を待ったのですが、その車が水を汲みに行ったままなかなか戻って来ず、待つこと1時間ほど。皆さん事務所の裏の小高い丘から景色を眺めたり、ロビボで披露する寸劇の練習をしたり、おしゃべりをしたり、と、忍耐強く待って下さいました。ロビボに着いてからも、今回宿泊させていただいた、ロビボ集落のグループ長ジュリオさんのお宅への道のりは長く、道案内のジュリオさんを、車を降りて待つこと30分ほど、そしてお宅まで歩くこと再び30分ほど。様々な場面で、予想外に時間がかかることに、私自身戸惑いましたが、予想できない部分はともかく、事前に確認できる部分は、もっと情報共有をしておくべきだった、という反省点にもなりました。

ジュリオさんのお宅に着いたら、いよいよ、コーヒー農家での滞在の始まりです。まず、ロビボ村でのコカマウの活動について、ジュリオさんにお話を伺い、質疑応答の後、村長さんからのご挨拶や、ほっかいどうピーストレードからのプレゼント贈呈を行いました。その後は2日間かけ、コーヒー収穫、選別、脱肉、乾燥、と、コーヒー1次加工の全行程を、体験、見学しました。それぞれにつき、ジュリオさんをはじめとして、村のみなさんが、丁寧に説明をしてくださり、ほとんどの人が初めて見るコーヒー収穫、加工の風景に、皆興味津々。コカマウの活動内容に関する質問も尽きませんでした。また、高く伸びたコーヒーの木に登っての収穫、収穫後の袋いっぱいになった豆の重さや、じりじりと日が照る中でじっとしゃがんでの選別など、ごく短時間の体験からも、コーヒー加工作業の大変さが伝わってきました。

私たちの訪問のためにトイレまでも作ってくださっていたロビボの人々の温かな歓迎は、本当に心打たれるものでした。ツアー一向がロビボに滞在した3日間、快適に過ごすことができるよう、トイレの建設だけではなく、18人分の寝床の確保や、食事の準備もしていただきました。自ら買って持っていった材料を使って、料理のお手伝いもしましたが、私たちが準備に貢献できた部分は、村の方々がしてくださったことに比べると、ほんのわずかだったのではないかと思います。次回以降は、日本食を作ってはどうか、片付けも私たちが分担しよう、等という意見も出ました。そのような心のこもったおもてなしを受けながら、言葉が通じない中でも、辞書やノートを片手に身振り手振りで夜遅くまで村の人々と話し込んだり、ボール遊びや音楽に興じたりする参加者の方々の姿が印象に残っています。



もう1つ印象に残っていることは、マウベシの事務所での振り返り会です。参加者の何人かから、「東ティモールに来る前は、もっと貧しくて、治安もよくないところだと思っていた」との発言があり、それに対して、パルシックの現地スタッフが「実際に来てみて、ティモールは平和なところだと感じたことを、日本の人たちに伝えてほしい」と応答していた場面。参加者の方々も、「人々が助け合っているから、貧しいという感じがしなかった」、「普段口にしていないコーヒーが、このように大切に作られているということが分かり、粗末にできないと改めて思った」等、滞在で得た様々な感想で応じました。

私自身、東ティモールへは2回目の訪問で、至らない部分がたくさんありましたが、ロビボの方々の温かさと、そして参加者の方々全員の、「ティモール時間」をも前向きに捉えてくださる寛大さ、スタッフだけでは行き届かない気配りを、率先してして下さる心遣いに、心から感謝した旅でした。

世界の大きな市場の中でなかなか普段触れることのできない、私たちが口にする食品の作られる現場を直接見ることができたこと、これも、今回のツアーの大きな収穫でしたが、人と人とのつながりを大切にして生活するということを見直せたこと、これが、今回の旅のもっと大きな収穫だったと、感じました。「フェアトレード」が目指す世界も、本当は、そのようなものなのではないか、と、思います。単に公正な価格で商品を買うことや、環境に負荷の少ない商品を選ぶことだけが、私たちができること、すべきことなのではなく、人間が人間らしく、生きることのできる社会を、どのようにしたら私たちは作ってゆけるのか、考えてゆくこと、それが、大げさなようではありますが、私たちが、フェアトレードを通して、目指すことなのではないか、と改めて、感じています。今回のツアーで皆が感じた、ティモールの人の温かさを、こわすような開発があってはならない、と、思います。

さいごに、参加者のみなさんにお会いすることができたことも、私自身にとっては、とても大きな喜びです。ありがとうございました。

(パルシック事務局 伊藤 文)

フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅

明星大学人文学部国際コミュニケーション学科3年

阿部 晴佳

私たちのツアー参加が決まるまでどのくらい時間がかかったのだろう。学校側としては5年越しのプロジェクトであり、最初で最後の学生になるかもしれないという話を聞いたとき、未知の体験にますます参加したいという気持ちが強まった。しかしその一方で、当日の8月28日を迎えるまで本当に参加できるのかという疑念を抱いていた。また他の参加者の方々が個人で参加するなか、私たちは大学からのグループ、そのうえ条件付きでの参加であったため多少ではあったが不安もあった。私たちがこの旅で多くのことを学び、体験することができたのはパルシックの方々をはじめ、他の参加者の方々、現地の方々という多くの方の協力があったからこそでありいまさらながら感謝の気持ちでいっぱいだ。

郷に入っては郷に従えという言葉どおり、時間通りに進まないのも異文化であると私はこの旅で最も強く感じた。普段は時間にとらわれている日本人としての自分がむしろ間違っているのではないかと思わせるくらいに村では誰もが時計に表示されるような時間を気にしていなかった。また季節によって少しずつ違うのであろうゆっくりとした彼らの時間の流れのなかでの生活が少し羨ましくも感じた。

授業卒での参加とはいいい、私の東ティモールについての知識はあまりにも乏しかったと思う。情報収集の手段はいくらでもあり、多くはないが学ぶことができる時間はあったがそれでも私は自分が実際に目で見て、感じ、体験したことがすべてなのだと考えていた。そしてそんな考えで参加した自分のあまりの知識のなさをきちんとした目的意識があり参加している方々との対話の中で実感し、もどかしく思った。

フェアトレードコーヒー生産の過程が想像以上に大変であることに体験を通じて感じた時、フェアトレード商品となる以前の生活が私の想像をはるかに超えたものであることをまた強く感じさせられた。このコーヒーが美味しくないわけがない。私が自分の目で見て、感じたからこそ言うことができるのだろうと思う。正直、まだブラックコーヒーが飲めるほど大人ではないので深みやコクが云々なんて難しいことはわからない。けれどこの先、少しでも多くの人にこのコーヒーの美味しさやを知ってもらえることができたと思う。まずは自分のまわりから、どうやって説明しようとか、伝えようとか難しく考えないでとりあえずヘム カフェすればいい、そうすれば伝わるのではないのかと思う。



パルシック東ティモールツアーに3回目の参加をして

荒井 久代

パルシック主催の東ティモールツアーに、「ほっかいどうピーストレード」(以下 HPT) では、北海道からでも参加しやすいようにと、今年は、パルシックとバリ島で合流するツアーを組んだので、ぐっと便利になり、HPT の会員 5 名が参加することができました。

私は 2007 年、2008 年について 3 回目の参加です。ココマウが行っている加工作業は大変手間がかかりますので、HPT で販売している「マウベシ珈琲」が非常に高い評価を得ていることを、生産者に会って、直接伝え、エールを送り続けたいと思ったからです。

■ディリ——貧富の格差と治安の安定

2 年ぶりのディリの町は、バイクや新車が少し増え、タクシーも以前より目に付き、沿道の家々や商店は少しずつきれいになり、青い屋根の大統領府も 2009 年新築で、大型のショッピングモールも建設中でした。しかし、石油収益によるバブリー景気の恩恵は、職を得られた一部の東ティモール人や月 2500 ドルに給与が上がった国会議員などに限られるとか。物価は上がる一方で、失業率が改善したわけではないそうです。そんな中で、治安はとてもよくなっていました。海岸では海水浴する子どもたちやのんびりと散歩するカップルなどを見かけました。2007 年、2008 年の緊張感と比べ、ゆるやかな空気が流れていました。格差が広がるなかで、今後、どうなるのでしょうか。

■がんばる新グループ・ロビボ

民泊は今年からココマウに 13 世帯が加わったロビボグループでした。繁忙期なのに、総勢 20 名ものツアーを、茅葺住居や高床式住居を開放し、おいしい食事を提供し、大歓迎で受け入れてくれました。私たちが収穫作業に参加させてもらったあとで休憩している間も、集落の人たちはひっきりなしに収穫したチェリーを運び込んで、選別していました。水にも恵まれ、できたての立派な水槽群を使って、しっかりと加工作業を行い、干し台のパーチメントの選別をしていました。ロビボ集落は、私がこれまで訪問した中でもアクセスの不便な、伝統的な所でした。日の出とともに働きだし、日の入りに家に帰り、眠るというシンプルで自然とともにある生活を垣間見て、私たちが、物、お金、地位など、余計な欲望だらけの中で暮らしているのだということを思わずにはいられませんでした。

ツアーの人数が多すぎた印象ですが、女性パワーに助けられました。凛とした伊藤淳子さん、心配りを欠かさなかった 3 人の若いパルシックスタッフ、ロビボのお料理上手な笑顔のお母さん、英語を母国語のように話す HPT の Y さんなど。みなさんありがとう。

帰るときは、マウベシで極上のコーヒーを淹れてくれたパルシック男性スタッフのネルソンさんに「ネクストイヤー、プロミス」

という言葉で送られてしまいました。魔力があるので、また、行くしかありません。



PARCIC スタディーツアー感想文

石井 千晶

「現地に行って、生産者たちはフェアトレードということをどの様に捉えているのかを、自分の目で見てみたい」今回、私がスタディーツアーに参加した理由です。今回、生産者の家に民泊でき、またインタビュー時間もあるとのことで、私の目的を達成できるチャンスはここにあると信じ、出発直前までアルバイトに勤しんでいました。

そして8月31日、いよいよ民泊させてもらうロビボ集落に無事到着し、家の中へ案内されました。学校の教科書で見たことのあるような民家、家畜の鳴き声、コーヒーの豆が干されている光景、子どもたちの笑い声、全てが私にとって初めて目にし、耳にしたものばかりでした。入れてもらった甘いコーヒーを片手に自己紹介、インタビューが始まりました。私からの質問はほとんどがフェアトレードに関するものでしたが、彼らはフェアトレードの質問になると少し難しい顔をしている様に感じました。やはり難しいことを聞いてしまったのかと少し残念な気持ちになりました。

しかしそんな気持ちもすぐに忘れ、気づくとロビボの人たちとのコミュニケーションに夢中になっていました。簡単な会話を教わったり、音楽に浸ったり、ロビボの人達は本当に優しく、一緒に楽しむ方法は無限にあるように感じました。

ただ楽しむだけではありません。コーヒーチェリーの収穫からパーチメントにする作業まで全てを私たちに説明しながら見せてくれ、一緒に作業をしました。もちろん手摘み作業ですし、炎天下の下で選別作業をし、まだ寒い朝に冷たい水でコーヒーチェリーの水洗いをします。それでも彼らは真剣に仕事に取り組み、笑顔で私たちにたくさんのことを教えてくれました。そして、一仕事終わるとまた甘いコーヒーをみんなで飲むのです。

このスタディーツアーで私が学んだことはフェアトレードという難しい言葉ではなく、生産者の顔が見えることで本当の商品の価値を知ることができる、ということでした。自分が飲むコーヒーはどこから来たのかを考えると、一杯のコーヒーにまた違う価値があるように感じます。このスタディーツアーに参加して、私はコーヒーを今までと違う味わい方が出来るようになりました。これから、この味わい方を少しでも多くの人に広めていきたいです。

「東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」に参加して

ほっかいどうピーストレードグループ

熊谷 明史

今回の東ティモールへの旅は当初の期待を上回る大変いい旅でした。北海道からは僕と、娘の有理、越田さん、八木田さん、荒井さんが参加しました。みなさんとは以前からの知り合いや友人の友達であったりしたため最初から打ち解けた楽しい旅仲間雰囲気でした。僕は長期有給休暇を使って参加したのですがこうした study tour なるものも初めてだったのでなんとなくワクワクした気持ちになっていました。

今回の旅行では、まず、大人数の我々を快く受け入れてくれたロビボの村の方々から心から感謝したいと思います。自分たちの寝起きしている場を我々のために提供してくれたのだろうと思います。パルシック東京事務所の伊藤さん、準備をしてくれた現地スタッフの伊藤さんや栗栖さん、他の東ティモールのスタッフの皆さんにも本当にお世話になりました。ありがとうございました。

たくさん印象深いことがありましたが一番深く感銘を受けたのはロビボに着いてロビボの人たちと交流会をしたときの組合リーダーの態度でした。我々の矢継ぎ早の質問に一つもいやな顔もみせず真摯に的確に答える彼には非常に優れた知性と人間性を感じました。

もう一つは元気な子供たちです。裸足で駆け回る小さな子供たちの生き活きとした眼が忘れられません。少し大きな子供たちはサッカーも上手でしたが彼らがギターをこともなく奏でる姿は印象に残りました。弦が1本なかろうが薄暗い部屋の中で静かに美しいメロディーを刻んでいくことができる彼らの感性はすばらしいと思いました。彼らが大きくなってどういう国になるのか楽しみです。

簡単ですが、僕の感想です。一緒に旅に参加された皆さんに心から感謝します。またどこかで出会えたらと思います。

東ティモール ツアー 感想

熊谷 有理

私の一日は「マウベシ珈琲」ではじまります。これは PARCIC が東ティモールから輸入した生豆を NPO 法人ほっかいどうピーストレードが地元・北海道で焙煎し販売しているコーヒーです。今回のツアーには、この事務局長を務める越田清和さんからお誘いを受け参加することになりました。単純に東ティモールに行ってみたかったのはもちろん、紙の上でしか知らないコーヒーの生産過程やフェアトレードの取組みを自分の目で見てみたかったのです。

東ティモールに着いてまず感じたのは、そこが想像以上に平和だということでした。聞くと治安はこの数年間でかなり良くなったそうで、人々も街の雰囲気も、つい最近まで凄惨な独立闘争が繰り広げられていた国とは思えないくらい、明るくのんびりしていました。それは首都ディリほど開発が進んでいないマウベシに行くとなおさらです。電気も水道も車もなく、テレビやインターネットもなく、特に時間に追われることもなく日々が過ぎてゆくロビボ集落。現代文明にどっぷり浸かった私には到底慣れない生活ですが、ロビボで平和にたくましく生きる人々の姿や天の河が流れる美しい夜空を眺めていると、そんな彼らの生活が少しうらやましく思えました。

ロビボに滞在した 2 日間は、短かったけれど大変貴重な経験となりました。チェリーの収穫から分別、パーチメントの選別といった作業を体験して、コーヒー豆一粒一粒に隠された苦労がよくわかりました。コーヒーに限らず、自分の食べるものがどうやってできているのか知るの大切なことだと思います。毎日当たり前のように飲んでいたコーヒーがずっと身近になった気がしました。

また、フェアトレードのあり方について改めて考えさせられました。ロビボのコーヒー生産者の方々は、COCAMAU に加盟したことで出荷の手間が省け、組合の資材で自ら豆を加工できるようになったことを喜んでいました。それだけでもこのフェアトレードの取組みは有意義に違いありませんが、PARCIC を含め私たち消費者は生産者に対してさらに「フェアトレードで得た収入を教育や福祉の面で地域に還元し、生活水準の向上につなげてほしい」という期待を少なからず持っていると思います。

しかし、現時点で組合員が望んでいる組合資金の使途は、長期的な投資ではなく使い切りの祭事費用だそうです。借金をしてでも祭事は盛大に行う彼らの習慣をふまえると当然ともいえる希望ですが、生産者と消費者の抱く「フェアトレード」の認識の差を、互いの価値観を一方的に否定したり押し付けたりせずに縮めていくにはどうしたらよいか（或はあえて縮める必要はあるのか?）、簡単には答えが出ない問題だと感じました。

今後、COCAMAU の規模が拡大するにつれ、新しい問題が次々と出てくるかもしれません。国の発展がコーヒー生産者の生活を大きく変えてしまうかもしれません。ただ、東ティモールにおけるフェアトレードコーヒー生産がどのような方向に進むにしても、最も重要なのは生産者と消費者が顔の見える関係を保ち対話を続けることだと私は思います。それこそがフェアトレードの条件である公正な取引を支える基盤で、持続性のある活動には不可欠だからです。

私は高校と大学でイギリスに留学して以来フェアトレードに関心を持ってきましたが、生産

者と消費者のパートナーシップの重要性についてはどこか客観的にしか捉えていませんでした。しかし、東ティモールで実際にフェアトレードコーヒー生産者と会った時、私の中で彼らとの「顔の見える関係」が単なる謳い文句から主観的な現実となり、消費者としての自分の選択が彼らに与える影響を実感しました。それが今回のツアーの一番の収穫です。日本ではまだフェアトレードへの理解が低いようですが、ツアーの参加者を媒介として、より多くの人々がフェアトレードに目を向けるようになればいいと思います。

最後に、ツアー中お世話になった皆様に深く感謝を申し上げます。

2010年度東ティモールツアー感想文

小鳥居 伸介

今回のツアーは私にとって、2001年、2002年以来、3度目の東ティモール訪問の旅でした。このツアーの主目的は、東ティモールのフェアトレードコーヒー生産者の現状を学ぶことでしたが、個人的には前回までと比べて、東ティモールにどのような変化があるだろうかという関心もありました。そして今回訪れてみて、やはりそれなりに様々な発見や気づきがありました。以下、ツアーの流れに沿って、思いつくままにつづってみようと思います。

まずディリの空港に到着した時には、相変わらず小さな建物ではありますが、さすがに施設が少し整備されてきたなと感じました。またディリ市内の様子も明らかに変わっていました。道路が良くなり、タクシーも含めて車の台数が増え、学校や、官庁、ホテル、商店などが整備されていました。ディリもやっと一国の首都らしい体裁を整えてきたなという感じです。特に政庁や大統領府の大きさには驚かされました。大統領府の中に簡単に入ることができたことも驚きでした。

マウベシでは到着して一見したところ、大きな変化は感じられませんでした。しばらく過ごしてみると、やはりそれなりの変化に気づきました。まず夜になっても完全に真っ暗にはならず、町の明かりが見えたこと。電気が通るようになったのは大きな変化だろうと思います。また、ゲストハウスなどの宿泊施設が増えていたこと。こんなに山奥の町にも旅行者が訪れるようになったということに、東ティモールも平和になったのだなあと感じました。

今回訪問したロビボ村では、コーヒー収穫や選別作業などを手伝わせてもらい、村の暮らしを少々体験することができました。もちろん、私たちツアー参加者が少し作業を手伝った程度で村の暮らしについて何かモノ申すことなどはおこがましいかぎりでしょうが、それでもあえて感じたことを少々述べたいと思います。前回のツアーで訪れた村と同様、今回訪れたロビボ村もコーヒー生産の村なので、基本的な暮らしぶりには違いはないと感じました。ただ、それは私の限られた経験によるものですから、実際にはこの村も含めたコーヒー生産の村々にも様々な変化が生じているのだらうと思います。とくにフェアトレードの組合に加入することによって、今後収入が向上し、人々の生活はきっと良くなることでしょう。これからのロビボ村がどうなるのかを、パルシックを通して今後も見守っていきたいと思います。

今回のツアーでは、親切で優しい東ティモールの人々と出会って、様々なすばらしい思い出ができました。また、それぞれ個性的なツアー参加者の皆さんとの交流もあり、楽しい日々を送ることができました。そして、最後まで無事にツアーを終えることができたのは、ひとえにパルシックのスタッフの方々のおかげです。今回のツアーで出会ったすべての方々に改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。また何年か後に、東ティモールを訪れることを心に期して、この文章を終えたいと思います。

東ティモール ツアー 感想

齊藤 達哉

私は今回が初めてのスタディーツアー、そして初めての海外ということで、出発する前はとも緊張していました。また明星大学から6人、北海道から5人のグループが来ると聞いていて人見知りな私としては、とても不安でした。

しかしいざ皆さんに会ってみると、添乗員の伊藤さんを含め皆積極的に話しかけてくれて、すぐに打ち解けることができ本当に過ごしやすいツアーでした。

東ティモールに着いてからの最初の市内観光では、主に東ティモールの歴史を学べるような所を中心に回っていただき、ただの観光ではなくスタディーツアーらしさの出ている市内観光でとても満足できました。また、治安面でこの国は大丈夫なのだろうかと思うぐらいあっさりトアポなしで大統領府に入れたことは、とても貴重な体験になりました。

コーヒーのチェリー摘み、加工の手伝いをさせてもらったロビボ集落では、代表者の方はこちらのする質問には全て快く受け答えしてくれて、住民の方々もみんな温かく迎え入れてくれました。集落の若い人たちは皆積極的に話しかけてきてくれ、私が英語を教える代わりにテトゥン語を教えてもらったりして、すぐに打ち解けることができましたと思います。

今回のツアー『フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅』という題で、生産者の方々ができるような生活をしているか見に行くことが目的でした。その目的は、ツアー内容のコーヒーチェリー収穫や選別、加工などをみてとても楽な暮らしではないという事は十分にわかりました。作業をしているときは新鮮な事をやっているのが楽しかったのですが、毎日あの作業をやると思うと逃げ出したい気持ちになるほど大変な作業でした。

私が今回一番生産者の暮らしを理解できた出来事は、ツアー内容にはないハプニングからでした。それは、私たちが飲むペットボトルの水がなくなり、ペットボトルを取りに山道を歩いたことです。山道を1時間以上歩き、水の入った段ボールを持ちまた集落に戻った時は、足がガクガクで動けない状態になりました。しかし普段住民の方たちはこれ以上の長い道を歩き市場などに向かっている事を考えたとき、どのくらい大変なことなのかがよくわかりました。これは、私を含めツアー参加者3人だけの特別な『良い』ハプニングでした。

今回、私たちツアー参加者が生産者の方々に与えた貢献は非常に小さいものだったと思います。しかしこの小さな積み重ねが、塵が積もり山になるように段々と影響を与え、生産者に貢献できるよう、パルシックが支えて行ってほしいと思います。

最後に私は今回のツアーを、お金と時間に余裕があれば、また参加したいとは思いませんでした。今回のツアーは、お金と余裕を作っても、2度3度参加したいと思えるようなツアーになりました。

パルシックの皆さん、生産者の方々、本当にどうもありがとうございました。

東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅に参加して

NPO 法人 JIPPO 事務局

高木 美智代

参加の目的

パルシクの「カフェ・ティモール」を一緒に販売する JIPPO で働き始めて 8 カ月。東ティモールのことを何一つ知らない私は、フェアトレードのコーヒーを販売しながら「どんなところでどんな人たちが作っているんだろう。生産者の暮らしを、コーヒーのよさを、お客さまたちにどうやって伝えたらいいんだろう」と悶々とした日々を過ごしてきました。また「いつか JIPPO も東ティモールのスタディツアーをやりたい」という目標もありました。ツアーに参加してこの二つの課題は達成できたと思います。ココマウの生産者の皆さんが誇りを持ってコーヒー栽培に取り組んでいることや、一粒一粒丁寧に出来上がっていく生産の過程を知り、また独立からの歴史的な背景を教えていただき、これから自信をもってカフェティモールのフェアトレードに取り組めまるようになったと実感しています。

信頼関係があるから出来るツアー

このツアーの魅力は何と言っても個人では行くことが難しい村の民家に宿泊し、人々の日常生活を体験できることでした。行く先々で電気も水も止まる不便の多い旅行ですが、自分がいかに日本で用意された便利さを無意識に享受しているか、立ち返る日々でもありました。

行く前、私は村に行くことをもっと簡単に考えていましたが、パルシクの現地職員が全てを企画、手配してくださっている様子や、村の生活が予想以上によそ者を迎えるのが大変な非日常で、私たちが訪れることで大きな負担がかかっていることを知り、容易に実施できるものではないことを思い知らされました。これは現地に事務所を置き、普段から信頼関係を築いているパルシクだからこそできるツアーなのです。



ロビボ村で最後のお別れ会

新たな出会いに感謝

ツアーではさまざまな人々との出会いが大きな収穫でした。もちろん東ティモールの人々との出会いは言うまでもありませんが、一緒に参加した日本人のみなさんから本当に多くの生き方、考え方を学びました。北海道でフェアトレードを展開されているグループ、地域に根ざした医療活動に踏み出そうとされているお医者さん。仕事でなく国際協力やボランティアに積極的に関わろうとしているみなさん。大学で教えていらっしゃる先生方には途上国の人々の生活の見方、考え方を教えていただきました。そして大きかったのは学生のみなさんの体当たりのコミュニケーションや鋭い観察力でした。自分ももっと心の窓を広げなくちゃと刺激を受けました。ツアーをつくりあげてくださったスタッフの方々、一緒に同じときを過ごしてくださったみなさんに心から感謝しています。ありがとうございました。



パルシクスタッフの3人(手前)

フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅に参加して

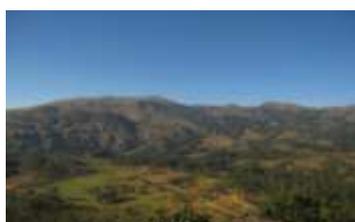
明星大学国際コミュニケーション学科

辰野 敏子

今回PARCICのスタディーツアーに参加し、私は現地で多くの貴重な体験をすることができました。事前学習として、ツアー参加前に授業で東ティモールの歴史、フェアトレードなどについて学んでいたのですが、実際に現地の人々と生活し、加工を手伝い、彼らと同じ体験をすることで初めて気付くことや感じるものがたくさんあったと思います。それらの体験は授業で学んだことだけでは絶対にわからなかったことだと思うので今回このツアーに参加できてとてもよかったと思います。

出発前私は独立したばかりの国ということで多少の不安を持っていました。しかし、着いてすぐに自分の考えが間違っていたということに気が付きました。東ティモールはとても良い国だったし、人々もとても温かい人ばかりでした。お葬式の期間中だったにもかかわらずトイレの準備をしてくれたり、イモ料理の作り方を教えてくれたり、寒がっていたら焚き火を用意してくれたりと彼らはいつも思いやりを持って接してくれました。私は彼らのおかげで人を思いやる大切さやコミュニケーションの楽しさを再確認できたと思います。今回実際にコーヒー豆の加工作業に参加することによって、いかに実を摘む作業や加工の工程が大変かを知ることができました。いつも当たり前のように飲んでいたコーヒーはたくさんの人々の努力からできていたのだということを知り、当たり前の様に飲んでいた自分が恥ずかしくなりました。

この活動を通して一番強く感じたことは、日本人達にもっと東ティモールの良さやフェアトレードについて知ってもらいたいということです。そのためにも少しでも多くの友人に東ティモールについて話していけたらなと思います。



「真」の自立国へ

森 真太郎

「東南アジアにおいて最貧国」東ティモール自分が勝手につけたキャッチフレーズとイメージ。途上国ファンの自分は「だからこそ訪れてみたい」それが今回、このツアーに参加した動機だった。ゆえに「フェアトレード」や「コーヒー栽培」を本気で勉強しようとしている参加者には大変申し訳ない思いでいっぱい。志望動機としてもう一つ、この国が「若い国」であることもある。2002年5月に独立。ということは建国してまだ10年経ってないということ。その国がどのような姿をして、どう進んでいこうとしているのか、それを肌で感じたい。そんな思いで2010年8月29日本土に上陸。

インドネシアのデンパサールより首都のディリにほぼ定刻通りに降り立つ。ふっと頭をよぎった。それはかつて第二次大戦にてこのティモール島を侵攻して現地の方々を苦しめた日本国民である自分たちが半世紀以上を経て訪れている現実。さらにかつてポルトガル領の植民地でそこから独立宣言をした東ティモールに対して、全面侵攻したインドネシアから隣国とはいえ入国したことは時代の流れと言ってしまうれば簡単だが、ちょっとだけセンチメンタルな気持ちになった。ただ、降り立った瞬間というのは純粹にこの地に足を踏み入れることができ何とも言えない嬉しさのようなものがジワジワ湧きあがった。いよいよだ！空港に降りてまず、その小ささに驚く。自分が今まで何カ国か訪れた国の中では言うまでもなく最少。国内の鳥取空港や能登空港にも行ったことがあるがそれよりも小さい。さらに、「UN」のマークが入った国連の車両が点在し、オーストラリア軍の軍用ヘリが散らばっていた。改めて東ティモールを訪れている実感をこれらの風景から感じる事ができた。息もつかせずパルシク事務所へ。途中の町並みも印象的で市街地は東南アジアらしく様々な店、家屋が連なっていたが、その中にポツンポツンと物凄い立派な政府系の建物が存在していた。周囲とあまりにもマッチしていないというかある種異様な感じを受けたのは自分だけであろうか？！事務所到着後、パルシクの活動について話を聞かせていただいた。独立時の歴史を挿みながらコーヒー関係全般においての活動、課題、今後の展望など。その中、自分の中で印象的なことはコーヒー生産者組合「コカマウ」についてだ。コカマウ自身がコーヒー生産に関する事を NGO の支援を受けていた現状から自分たちがエンパワメントして横の繋がりを強化して「自立」していこうとしているとのこと。このことに大変感銘を受けた。自立というのは言葉で言うのは簡単だが実践するのは生易しいことではない。だからこそ、先進国の支援が軌道に乗るまで必要なのかもしれないが、「自分たちの手で物事を成していく」ことは国の成長の根幹と同じであると自分は考える。しっかりとした理念、信念を土台に行政、同業者、住民巻き込んで協力し同じ方向を向かないとできない。組合数が増えているなど具体的に階段を一步一步上っていることも聞けてこの先もぜひ、頑張ってもらいたいと願わずにはいられなかった。

3日目に入りいよいよ次なる訪問地「マウベシ」へ。と、その前に午前中に訪れたサンタクルス墓地についてちょっと触れたい。かつて独立宣言した際、インドネシア軍の侵攻によって起こった悲劇の一つ。墓地は乱雑に置かれていてその姿からもとてもいたたまれない感覚に襲われた。サンタクルス、彼が亡くなったのは1991年10月28日（享年 18）。くしくも自分の誕生日と同じ。なにか運命的な・少し大袈裟かな！マウベシまでの道のりはまさにサバイバル（ドライバーお疲れ様）道はボコボコ、細い道で対向車が来るとスピードを落として行くようなことの繰り返し。さらにS字が多く見通しも悪いため、1速2速での運転に終始。こ

れから都市だけではない郊外のインフラ整備も言うまでもなくこれからの課題であろう。到着したころにはあたり一面真っ暗。がその分、空の星の輝き、自然のプラネタリウムみたい。現地スタッフの歓迎も相まって疲れも吹き飛んだ。

4日目、いよいよ自分の中での「メインディッシュ」ロビボ村へ。結論から申し上げれば有無も言わず楽しかった。なぜなら、現地の人と触れ合うことが自分の中でかなりのウエイトを占めていたからだ。予想通り、コミュニケーションには苦勞したがそんなことは想定内の範囲だし全然苦にならなかった。主に、テツン語の挨拶とボディラングエジだけだったが現地の人たちのフレンドリーさや優しさ、純粋さに本当に救われた。コーヒー加工の手伝いもいい経験となった。恥ずかしながら今まで、コーヒーについて製造過程がどうなっているかなんて考えたこともなかった。コーヒーの実を見るのも当然初めて。だからこそとても新鮮でぜひこの経験を日本人たちに伝えようと思っている。細かいことだが寒さで凍えながら「BALIBO」という映画を観させていただいた。実は自分の隠れテーマが東ティモールの独立における様々な痕跡をみたいというのが少なからずあった。サンタクルス墓地はその一つで映画は簡単に言えばオーストラリアジャーナリスト5名がインドネシア軍に殺害されるもの。音声はなく、読み取るだけでしかなかったが映像には吸い寄せられた。ここにおいても、いろんな犠牲があつて今があると再認識させられた。

村での別れ、マウベシでの別れ、寂しさうんぬんより自分が一つ気にとめたことがあった。それは別れのあいさつで、ほとんどの人が「日本に無事に帰ってください」と言っていたことだ。何か当たり前に聞こえることかもしれないが自分には彼らの真の優しさが詰まった言葉のように受け取れて切なく感じたのを覚えている。

ディリに戻って環境 NGO「ファブラスファンデーション」の訪問についても面白いことを言っていて納得したことがある。それは東ティモールにおいて環境問題を住民に意識してもらうためにはどうすればいいかということだ。代表の方が「法律に盛り込んでいきたい」とおっしゃっていたが大賛成。意識付けということが議題になると決まって抽象的な啓発活動に走りがちだが（もちろんそれも大事）きちっと法的な整備をすることによって目的達成の近道になると思うので頑張してほしい

今回のツアーは本当に感慨深いものとなった。ありとあらゆることがこれからなんだと。若い国なんだから当たり前かもしれない。その分、可能性は無限大。それはディリでもマウベシでもロビボでも同じ。だからこそ、「真」の自立国への発展を期待せずにはいられない。自分が思う自立は経済発展が同義語ではない。豊かになることを否定しないが全てじゃないような気がする。今回、様々な人たちと出会えた。しかし、例えば、多くはずっと村にいななければいけない。あるいはこの仕事に従事し続けなければいけないなど。どうしても経済面、家族関係、限られた情報、その他の要因である程度決まった生き方になってしまう。農村の方の話を聞いた時に思ったのだ。もちろん本人が望んで選んだ道なら尊重すべきなのは当然。ただ、それも限定された選択肢の中で自分の道を決めなければならぬのは仕方ないの言葉で片付けていいのか。これから東ティモールという国がどのような道を進んでいくのか誰も未知数であることは言うまでもないが、せめて、一人一人の国民が自分の責任において人生を選択できる社会。その環境が形成されることを強く望む。その中でコーヒー栽培に従事することを望む人がいればそれは嬉しいことである。このグローバル化の時代の中でいつの日か世界の中で大きな存在感を示せる日がくることを待ち遠しく、かつ辛抱強く見守っていきたい。そう、心に刻んだ10日間だった。

コーヒー生産者の村ロビボを訪ねて

明星大学 毛利聡子

東ティモールの村を訪ねるのは今回、2度目。最初は、2005年、(株)オルタ・トレード・ジャパンのスタッフに同行しました。その時は、マウベシのポウサダホテルに泊まり、そこから4つの村を訪ね、豆の選別、脱殻の状態、パーチメントの乾燥度など、バイヤーの視点から生産者を見ました。今回は、村に滞在し、生産者の方と生活を共にすることで、前回とは違ったコーヒー中心の村の人々の暮らしを垣間見ることが出来ました。以下はその一コマです。

ロビボの朝は早い。4時過ぎには屋根のてっぺんに上った2羽の鶏が雄叫びをあげ、家畜が動き出す。子どもたちがヤギの紐を引っ張って高台に連れて行く。私たちは小屋の中で7時過ぎまで寝ていたが、村の人々はすでに活動を開始。水を汲み、お湯を沸かし、コーヒーを煎れ、キャッサバをふかす。本当にベーシックな朝食をとり、一日が始まる。この日の朝食はキャッサバだけだと気づき、あわてて2つ口に入れる。これからコーヒーの収穫に行くのにお腹がもたないといけなから。時計はないので、時間はゆったりと流れる。2時間ほど山に入り、コーヒーの実を採って村に戻る。ほどよく汗をかき、12時も回っているから、そろそろお昼ご飯かなと思っている私たちをよそに、2時になっても昼食にならない・・・でもそれはロビボの時間に委ねるしかない。テトゥン語が話せない私たちは食事の催促もできず、お母さんたちが料理を作っている小屋を覗く。そこは真っ暗。何気なくシャッター切った先に牛の片足があつて思わず後ずさる。屋根の梁には牛の頭や内臓がぶら下がっている。ここには冷蔵庫はない。その真下でご飯を炊き、野菜を炒めるから生肉も煙で自然に燻される。なるほどうまくできている。でも、カマドをつくれればもっと効率よく料理ができるし、お母さんたちも煙でむせることもないのに（むせていたのは私たちだったけど）とも思う。後で、その牛は、お葬式のときに絞めた牛だと聞いた。お葬式は村にとって大切な行事で、2週間続く。私たちが訪問したのは、村人二人がなくなった後だったそう。

村の人たちとパーチメントを一つ一つ、丁寧により分けていく。確認したものは順番に分けていかないと、また同じことをしないといけないと村のお父さんから指導を受ける。確かにそう。前かがみの作業は腰が痛い。でも背中にお日様が当たって心地良い。そばに小さな小屋があり、屋根のようなひさしがついている。焚き火のあとも・・・村の大切な収穫物（パーチメント）が盗まれないよう、男性は見張りをするため、ここで順番に寝ているとのこと。ロビボの夜は夏でも10度以下に冷えるのに、その労働（夜勤）がコーヒー生産のコストに入ることはたぶんだらう。

パーチメントではじかれた欠損したコーヒー豆は、村の人々が自分たちで砕き、フライパンで炒り、砂糖をたっぷり入れて飲む。



村のお母さんと一緒にコーヒー豆を（餅つきのように）棒で叩いたが、力負けしてしまった。お母さんたちは細腕だけど、すごくたくましい。

自分たちの生活の中では当たり前のことが、ロビボの村ではそうではない。それは、私たちの生活が進んでいて、ロビボの人々が遅れているということではない。違いを受け入れていくことから、世界はどんどん広がっていく。まさに、「百聞は一見に如かず」である。決して豊かなものに囲まれている訳ではないのに、客人をもてなそうとする気持ちが有難かった。つねに客人に食事を先にさせて、自分たちは後。人数も多かったのも、炊事のお母さんはほとんど四六時中、食事を作っていたと思われる。電気もなく、換気が悪いため、慣れない私たちは暗闇に何も見えないし、目が煙でしょぼしょぼし、咳き込み、手伝うどころではない。本当に役立たずである。

私たちが毎日、何気なく飲んでいるコーヒーは、誰によって、どのように作られているのかを知ることが今回の旅（フィールドワーク）の目的でした。日本から丸二日かかって着いた村で、二泊三日の滞在は、本当に短いものでしたが、村で寝起きする中で、コーヒー生産者の素顔を見ることができたのは、大きな収穫でした。コーヒーを飲むたびに、星空を仰ぐたびに、ロビボの人々の暮らしや笑顔が思い出されます。コーヒーの豆を通じて私たちはつながっているのですね。



東ティモール ツアー 感想文

福原 雅子

2010年夏に、東ティモールのスタディーツアーに参加させていただきました。今回のツアー参加は私にとって初めての経験でした。

大学の授業でフェアトレードと東ティモールについて勉強していましたが、文字で読み、写真で見ていたのと、実際自分の目で見て体験したことは大きく違っていました。正直なところ、コーヒー収穫とその選別をもっと楽な作業だと思っていた私は、半日体験しただけでとても疲れてしまいました。村の人達はその作業を一日中、それも忙しい収穫時期には毎日行っているのだと思うと、頭が上がりません。場所、作業は私が今回訪れたロビボ村とは多少違うかと思いますが、私たちが普段飲んでいるコーヒーにはたくさんのコーヒー生産者の力と気持ちがあり、私たちに届いていることを知りました。一杯のコーヒーを感謝の気持ちでおいしくいただけるように思えたことが、私がこのスタディーツアーに参加させていただいて得た一番の収穫です。

ロビボ村の人々は皆とても親切でフレンドリーで、言葉の通じない私たちにたくさん話かけてくれました。村に滞在させていただいたのは、たったの2泊3日でしたが、それは濃くとても充実したものでした。それはロビボの人達のおかげだと私は思っています。村の時間はゆっくり流れ、ツアーならではの時間厳守、という時間に縛られるようなことは一切なく、団体行動で皆常に一緒といったことが無かったことも良かったです。楽しそうなところに行ってみる、あの人と絡んでみよう、これをしてみたい、といったように自分のやりたいことを自由にさせていただきました。スケジュールがいっぱい詰まっていたらきっと出来なかったこともあったと思うので、本当に良かったです。

私は出発前にツアーに引率して下さる大学の先生に、ある提案をしました。その提案は村の人達に私たちの国を紹介することでした。私たちが村を訪れて、コーヒー収穫について勉強、体験させていただく。私たちはそこで与えてもらうだけでなく、私たちにも何か村の人達に出来ることはないだろうかと思ったことがきっかけです。大学の先生からパルシックの方に提案をしていただいたところ、外からの情報が少ないロビボ村では、日本という国を知らないから、きっと村の人達は喜びます。と、快く承諾していただきました。私は、日本の四季、お祭り、着物、富士山、都市の風景などの写真をたくさんプリントアウトしました。他にも日本で誰もが知っている歌を歌おうと思い、「森のくまさん」と「幸せなら手をたたこう」の歌詞を用意しました。

実際村で写真を見せながら日本の紹介をしたときにはパルシックのスタッフの方に通訳していただきました。「森のくまさん」は演劇を含めてやらせていただきました。これは村の人達も笑顔で見てくれました。「幸せなら手をたたこう」は少しアレンジを加えて歌いました。手をたたくななどのアクションを本当は一緒にやりたかったのですが、やってくれたのはツアー参加者の方だけだったので少し悲しかったのですが、紹介がすべて終わった後に、「さっきの歌教えてよ」と村の一部の人が集まってきてくれ、私と友人で輪になり教えました。最後に手をつないでジャンプ、というアレンジだったので歌いながらやるのは息の切れるものでしたが、「もう一

回、もう一回！」とゆって来て、何度も何度も一緒に歌いました。言葉が通じなくても楽しんでるのが伝わってきて、提案をしてやらせていただいて本当に良かったと感じました。

夜はとても冷えまして。私たちが寒がっているのを見て、村の方が焚き火を作ってくれたり、火のある台所の部屋に行こうと誘ってくれたりしてくれました。私たちへの親切心に、寒さなど忘れるほど心も体もポカポカと暖かくなりました。というのは少し言い過ぎましたが、村の人達の優しさが本当に嬉しかったです。言葉足りない自分をもどかしくなりました。共通語があったらどんなにいいのだろう、と何度も思いました。

私はこのツアーにまた参加したいと考えています。そしてロビボ村にまた訪れて、村の人達と再会したいです。その時には東ティモールのテトゥーン語をたらふく覚えて、村の人達を驚かしたいです。

ツアー参加者同士で感想やフェアトレードについての意見を聞いたり話し合ったりした時間も貴重でした。私には無かった考えを知り、フェアトレードの課題など、大学の授業で事前学習しただけでは得られなかったことを知ることが出来ました。更にラッキーなことに、現地のパルシックスタッフの方とツアー参加者の方で海外青年協力隊の経験がある方と話すことが出来ました。私は将来海外青年協力隊に参加することが夢なので、これも貴重な経験でした。

出発前は、治安と食生活、病気などに少なからず不安を抱いていましたが、最後まで健康そのもので元気にツアーを楽しめました。ごはんもおいしく、体調も崩すことがなかったからこそ積極的に行動でき、良い経験が出来たと思うので、それもこれもパルシックスの方のおかげだと思っています。

本当に本当にありがとうございました。次また参加した際も、是非よろしくお願い致します。

東ティモール ツアー 感想

藤井 梓

今回のツアーに参加させていただくことになるまで、フェアトレードという言葉やコーヒーをどのように生産しているかなどまったく知らずにいました。東ティモールに決めたのもまったく聞いたことのない国だったので、ぜひどのような国か見てみたい！！という気持ちで決めました。

実際に行ってみると想像以上に町に活気があり、雰囲気もとてもいい国でした。山に入ってもその印象は変わらず、自然の豊かさと村の人々の温かい歓迎で緊張していた気持ちも体も良くなりました。

コーヒーの生産過程を見学、また実際に体験させていただくことで、コーヒーはほんとうに手間暇かけて作られていることがわかりました。私の実家が農家なので暑い中黙々と作業をする大変さは知っていましたが、村の方々も同じように黙々と作業をやり、時間があるなら仕事をする、という仕事への姿勢が国や生産するものが違っても同じだったのでうれしく感じました。また、自分が関わったコーヒーが誰かの手に渡るということを想像したら、少しドキドキしました。

終わった後の反省としては、もっと東ティモールについて勉強していくべきだったことです。英語がまったく通じず、自分はポルトガル語も話せないのでコミュニケーションをとるのに苦労しました。また、歴史も少ししか調べてこなかったのが、知っていたら違う視点から東ティモールを見えたかもしれません。

良かった点は全く知らない国を勝手なイメージをつけて貧困だ、危ないなどと決めつけてしまうことがどんなにさみしいことかわかった点です。実際に見て人と触れ合ってみないとその国ことを知れないという当たり前のことを、実感できました。もし少しでも興味がわいたら、実際に見に行ったり調べたりすることが大切だと思いました。

このツアーのいいところは民泊をさせていただき、また実際に作業を体験できる場所だと思います。コーヒーを生産する過程を見学するだけではなく、実際に体験でき話を聞ける場所に魅力を感じました。とても楽しく貴重な体験をさせていただきました。

東チモール感想文

八木田 道敏

日中の強い日差しと日没後の冷え込み、流れのない川床、が特に印象に残っています。

事前に読んだ本に書いてあった、「コーヒーベルト」、「産地高度」の意味を身を以って体験できた旅でした。

これまでは旅行代理店のパック旅行が多く、体験型、滞在型の旅がしたいと思っていたので、越田さんから今回の話を聞いた時、スタディツアーの意味もわからないまま二つ返事で参加することにしました。

私は JICA のシニアボランティアとしてフィジーで 2 年間過ごしたことがあり、乗り換え地のバリ島に着いた時、南太平洋の日差しの強さと暑さを懐かしく思い出していました。

しかし、目的地のロビボ村で夜を迎えた時の冷え込み、日中との気温差には驚きました。

事前の配布資料と経験者からの話で、気持ちと衣類の準備は充分だったのですが、やはり実際に体験してみないとわからないものだと思います。

最初の夜は晴天で、天の川がはっきり見えていたためか、夜間の冷え込みが厳しく、私は何枚も重ね着をして、他の男性達とは別に一人で土間に直に寝袋で寝たのですが、その土の冷たさに耐えきれず、夜中に椅子で簡易ベッドを作り、やっと眠ることができました。

本に書いてあった、「朝夕の温度差が大きい高地で栽培されたコーヒーほど質が高い」という東チモールの産地特性を身を以って感じた次第です。

また、水のない川も印象深いものでした。

日本の河川を調査した欧米の学者が、川の流れの急なのを見て、「これは川ではなく滝だ！」といった、という話を聞いたことがあります。大陸のゆったりした大河の流れと比較してのことでしょうが、東チモールの川は一体何と表現すればよいのかと思います。あの細長い島に二千メートル級の山があって、そこを流れ降るわけですから、乾季に水が無くなるわけです。ロビボ村にも溪流はありましたが、乾季なので流れというより淀みという感じで、水車などの動力源には到底なりそうもありませんでした。

他にも多くのことが未消化のまま私の中に残っていて、これから時間の経過とともに、良い経験として浸み込んでいくものと思います。

今回のスタディツアーを振り返ってみると、大の苦手の感想文を書いていることも含め、何があっても勉強という気持ちだったし、全てが新鮮で、今は、行って良かった、また行きたいという気持です。

ありがとうございました。

東ティモール ~コーヒー生産者を訪ねて~

明星大学
結縄みづき

私自身東ティモールに関する知識は、始めは殆どといっていい程ありませんでした。国名のみ「聞いたことあるかも」という感じで知っているだけで、最近できた国だという事も、数年前にも暴動が起こったことも、どこにあるのかも、どのような人種なのかさえも知りませんでした。そして、授業でどのような国なのか学べば学ぶほど、行くことに対して覚悟をするようになり、心の準備をするようになりました。しかし、実際に行ってみると私の想像とは全く異なった東ティモールがありました。日本の外務省が東ティモールの悪いところばかりを押した情報とは違う、そして日本人とも違う感覚や習慣、日常、言語、優しさを持った村の人々が温かく出迎えてくれました。

私たちがコーヒーの収穫作業などをさせていただき、三日間生活させていただいたロビボの村では、電気はなく、お風呂はもちろんトイレもなく、家の屋根は藁でできていて、私たちの生活とはかけ離れた生活がそこにはありました。沢山の文化の違いや生活環境の違いもありました。しかし、なにもないことが逆に無駄のない時間を作っていて、今の日本人に欠けている人と人との直接的なコミュニケーションをとる場を作っていました。村では想像以上に居心地のいい環境を私たちに提供してくれ、不便しないように村の人々が全力でサポートしてくれたのでとても過ごしやすい三日間でした。たった三日間でしたが、そこでの生活に苦を感じることはありませんでした。むしろマウベシに戻ったときに、日本に比べると勿論劣ってはいますがトイレがあり、シャワーもあり、お湯も出て、ベッドに寝ることができて、蛇口を捻れば水が出る、そんな環境に感動しました。とても贅沢だと思いました。私たち日本人がどれだけ恵まれた贅沢な環境にいて、それを当たり前と思い、無駄遣いしているのかを痛感することができました。このような発展途上国に今の日本の若者はみんな行くべきだと思いました。行き、幸せについての原点に戻るべきだと思いました。

コーヒーを生活の一部として飲み、欲しい時に買うことが出来、飲みたいときに飲むことが出来る日本人の大多数は、東ティモールに行く前の私のようにどのようにコーヒーが作られているかなど知らず、考えたこともなかったと思います。実際に体験させていただいたコーヒー豆の収穫や収穫した実を色や熟度ごとに選別する作業、果肉をとったあとの豆を干しながら大きさやよくない豆を選別する作業のどれもが重労働で細かく大変な作業でした。コーヒー豆がこんなにも大変な作業をして生産されているなんて知らずに飲んでいる消費者はどんなに沢山いるのだらうと思いました。そして知り、搾取され、限られたものの中、限られた収入の中で暮らしている人々の存在を知って、少しでも貢献できる何かを考え、見つけたい、見つけてほしいと思いました。

私は今の日本人はとても冷たい人種だと思います。そんな国にいて、それが日常で、豊かな生活をして、恵まれた環境にいるにも関わらずそれに気づけず、日々生活している私たちのほうが不幸だと感じました。ロビボの人々は言語が違い、通じないにも関わらず、関係なしにテトゥン語で話しかけてきてくれ、私たちがそのまま鸚鵡返しをするか、知っているテトゥン語

やジェスチャーで対話するだけしかできなくても、楽しそうに満面の笑みを私たちにくれました。日本が発達と共に失ったものが、そこにはある気がしました。今回のスタディーツアーで沢山のことを学んで体験し、気づき、知ることができました。一人でも多くの方がこのような形のスタディーツアーに参加し、日本の自分たちの置かれている環境を改めて把握し、そして、発展途上国の現状を知ることが私たち先進国に住む人が出来ることの一つなのではないか、と思います。私も自分の見たものや聞いたもの、体験したこと、東ティモールは危険ではないということ等を、少しでも多くの人に伝え、広めていければと思います。そして、今回東ティモールへのこのようなツアーを企画し、行ってくださった PARCIC の皆さん、私たちのサポートをしてくれた現地スタッフのみなさん、そして、私たちを歓迎し受け入れてくれたコーヒー生産者のみなさん、本当に貴重な体験をありがとうございました。

「はじめての東ティモール」

吉武 恵美子

このツアーに参加して、お土産のコーヒーを手渡す時、「どうして東ティモールに行ってきたの？」と理由を問われるか、「政情不安な怖い国によく行ったわね！」と驚きともあきれともとられるようなリアクションを受けることが多いです。

改めて考えてみたとき、動機はかなり不純なもので、「いったことのない国に行ってみたかった。」そして、その結果このツアーに出会ったからという、単純な理由でした。実は日常生活ではコーヒーよりもお茶派で、嫌いじゃないけれど、それほどコーヒーについて深い知識も味の違いもわからない、「フェアトレード」という言葉は知っているけれど、実際は、1円でも安い品物、お得な安売り情報をこまめにチェックする毎日。そんな自分が参加してもよいのだろうか・・・という疑問も感じつつ、ぬけるような青空のディリの空港に降り立った時には、そのまぶしいくらいの青さに単純に感動する、気楽な旅行者でした。

そんな考えが少しずつ変わったのは、首都ディリからマウベシ、そしてロビボ集落に実際に滞在し、二泊三日という短い滞在時間で、コーヒーの作業を体験、いやほんの少し垣間見ただけで、変わったように感じます。

傾斜地でのコーヒー豆の収穫、灼熱の太陽の下での選別作業を通じて、コーヒー豆の一粒一粒が愛おしく感じました。もうコーヒーの粉の一粒たりとも粗末にできないそんな気持ちにさえなるのは不思議なものです。

COCAMAU のメンバーの方のプライドを持ってコーヒー作りに取り組む姿勢を見て、日々の自分の仕事を反省しました。

また、日常生活の中で、「食事のしたくは手短かにささっと簡単料理！」なんていうことができるのは、電気やガス、システムキッチンなどがあるからできること。コンビニもデパ地下の惣菜も、宅配システムもない暮らし。それがいいか悪いかではないけれど、普段自分が当たり前に使っているものがない中でのロビボ集落の女性たちの毎日繰り返される毎日の営みについて、大いに考えさせられました。

最初は、単純な動機で参加したけれど、このツアーが終わってみて、さまざまなことを考えさせられるきっかけになりました。

そして、最初は「なぜ」といっていた人たちも、お土産に渡したコーヒーを飲んだあとは、「すごい美味しい！」「東ティモールでコーヒー作っているのを知らなかった！」「危ない国だというイメージばかりだったけれど、なんか変わった」という感想をよせてくれるのです。

まだまだコーヒーの味の違いに詳しくはなりきれないけれど、1杯のコーヒーの持つ力・・・に驚く日々が続きつつ、ロビボ集落の日々が懐かしい気持ちと感謝でいっぱいです。

スタディーツアーを終えて

東ティモールへ来て1年半が経ちましたが、今回のように大勢の皆様のアテンドをするのは初めてで、私自身とても楽しみではしかなかったと同時に、緊張やプレッシャーも大きく感じていました。不慣れなアテンドや、待ち時間、ドタバタのスケジュール・・・、不満やお怒りの声があって当然の状況の中で、それを理解してくれ、時にはそれを楽しんでもくれ、あたたかくこのツアーを受け入れていただいたこと、まずは心よりお礼申し上げます。

スタディーツアーを通じて、私たちは、ああ、日本ではこんな人たちが自分たちのコーヒーを飲んでくれているんだ、自分たちのコーヒーを売るために、こんなに頑張ってくれているんだと知ることができました。顔を覚えて、名前を知って、どんな人かちょっとずつ分かってきて、今はもう、大勢の顔も名前も分からない消費者ではなく、Mana Emiko、Maun Kotorii、Tatsuya、Maun Shintaro、Toshiko、Masako、Azu、Mizuki、Haruka、Profesora（先生・毛利さんのこと）、Chiaki、Mana Michiyo、Maun Yagita、Senora Arai、Doutor（医者・熊谷さんのこと）、Yuri、Maun Koshi、Fumi、Sayuri という、一人一人の個人となって存在するのです。きっと、皆様にとっても同じで、今はもう、コーヒーを作る人たちは、顔も名前も分からない生産者ではなく、Maun Julio、Maun Thomas、Mana Maria、あの元気なおじいちゃん、あのよくしゃべる若者・・・という、一人ひとりの個人となって存在していると思います。そんな人たちに、お互いが思いを馳せながら作るコーヒー、楽しむコーヒー、そんな関係が私にとってのフェアトレードです。

村の生活は裕福とはいえません。教育を後回しにして祭事に費やすお金、膨らむ借金、水や電気を十分に得られない環境、直していかないといけないことはまだまだたくさんあります。フェアトレードを通じて、学校や病院が建てられること、道路や橋ができること、そんな大きなことにはまだまだ遠い道のりです。それでも、家族みんなが働き学び、3度のごはんを食べ、眠り、休み、また働いたり学んだりできる、そんな日常の先に、目標や将来の夢を持てるようになり実現できること、そんなことがこれから先ずっと続いていくこと、続けていけることが、今の私にとってのフェアトレードです。

村の人たちに負担をかけてしまったのではないかと、もっと手伝えることがあったのではないかと、こちらを気に掛けて下さる声もいただきましたが、みなさんがこうしてはるばるやってきて下さること、楽しそうな笑顔を見ること、そんな笑顔を自分たちが提供できているんだと感じられることが、私たちにとってもうれしいことです。ロビボ村で過ごした3日間はあっという間だったけれど、けっして短くて瞬間的なものではなく、これからもずっと私たちの思い出に残っていきます。私たちはここ、東ティモールで、皆様にまたお会いできること、いつでも Welcome! で待っています。

ロビボ村は2010年から新しくココマウ協同組合に参加したグループです。昨年のコーヒーのモニタリングや女性グループの活動で交流のあった人たちではなく、私自身も今回のスタディーツアーをきっかけに、この村の人たちと、ぐっと距離を縮めることができたこと、そして、いろんなキャラクターを持ち、考えを持ち、私に新しい刺激を与えてくださった、すてきな皆様にお会いできたこと、感謝しています。

本当にありがとうございました。

(パルシック事務局 栗栖 奈津美)

第2日目 2010年8月30日「東ティモールの歴史を学ぶ」

(荒井久代さん執筆)

ツアーでは、8月30日(月)午前は、「住民投票記念式典見学・市内観光」と並行して「東ティモールの歴史を学ぶ」というプログラムが用意されていました。主に明星大生対象でしたが、HPTは2班に分かれ、私が聴講しました。以下はその概要です。メモを頼りにまとめたので不確かなところも多く、引用等、ご遠慮ください。(荒井)

研修会・独立に向けた学生レジスタンス運動の歴史(概要)

学生組織「RENETIL」元代表 ジョゼ・アントニオ・ネベスさん

(通訳: パルシック東京事務所・伊藤文さん)

東ティモールは16世紀からポルトガルの支配を受けてきましたが、1974年、本国でクーデターが起こり、一気に独立の気運が高まりました。この1974年以降のレジスタンス運動について、お話したいと思います。



■インドネシアの侵略とレジスタンス運動

1974年のポルトガルの政変により、アンゴラやモザンビークが独立するなかで、東ティモールも独立か否かの選択を迫られました。

抵抗運動史を語るジョゼさん

東ティモールの3つの政党は、①フレテリン(東ティモール独立革命戦線)は共産主義の即時独立派、②UDT(民主連合)は25年間の期限付きでポルトガル連邦政府の下にいる、③APODETI(ティモール人民民主主義協議会)はインドネシアと併合するが、住民投票で決定する、という考えでした。どれにするかなかなか決定できませんでした。

1975年8月10日、UDTがフレテリンに対してクーデターを起こし、政党同士の闘争が始まり、1975年11月まで、3ヶ月続きました。1975年11月、フレテリンが全国を制圧し、東ティモールの独立を宣言しました。しかし、それを認めないとする隣国のインドネシアが、1975年12月、軍事侵攻を開始しました。独立派のフレテリンとフレテリンに統治されていた軍の人たちはジャングルへ逃亡し、こうして、レジスタンス運動はジャングルの中から始まりました。

1976年7月17日、インドネシアは一方的に東ティモール併合を宣言しました。西ティモールに逃げていたAPODETIやUDTはインドネシア軍に組織されました。国連やポルトガルはインドネシアによる併合を認めず、住民自決権を要請しましたが、インドネシア軍はレジスタンス運動を厳しく弾圧し続け、多くの人々が殺され、投獄されました。フレテリンの最高指揮者ニコラウ・ロバト氏も射殺されました。



2007年シャナナ資料館の展示写真

レジスタンス運動の組織には、①ジャングルを中心とした軍の活動、②都市での地下活動、③外国からの運動（ラモス・ホルタ氏がリーダーシップをとり、人権、自由、独立を国際社会へ訴えた）がありましたが、シャナナ・グスマン氏が団結を訴え、CNRM（東ティモール民族抵抗評議会／その後、CNRM からCNRTと名）が結成されました。

レジスタンス運動は、独立まで、20年以上も続いたのです。

■学生と青年たちのレジスタンス運動

1985年頃、独立への地下活動のムーブメントは、インドネシアで学ぶ学生にも広がりました。1988年、バリのデンパサールで「RENETIL: Resistencia Nacional dos Estudantes de Timor-Leste」という学生運動の組織が立ち上がりました。10人のティモール人学生で始まったこの運動は、ジャワやジャカルタ、カリマンタンにも広がり、多くの学生が参加しました。当時、インドネシアでは300～400人のティモール人学生が学んでいました。

この学生運動の目的は、①インドネシアで学ぶ学生をインドネシアの政治から遠ざける、②東ティモール国内でのインドネシアの人権侵害の状況を国際社会に訴える、③東ティモール国内に戻ったときのリーダーになる準備をすすめるという、ことでした。国内、海外、インドネシアでのレジスタンス運動、この3つをつなげることも役目の一つでした。

私は1986年から1988年、ジャワ島のマランで学んでいました。RENETILでは主にマランを担当していました。1989年、ディリで1年間、抵抗運動を行い、1990年、再度マランに戻り、デンパサールやジャワで地下活動の組織化をしました。1991年、インドネシア国軍の住民虐殺事件「サンタクルス事件」が起り、多くの学生たちも逮捕されました。RENETIL代表（当時）のフェルナンド・ラサマ氏（現国会議員）も逮捕されたため、1992年～1994年、私が代表を務めました。その後、私は1994年に逮捕され、1997年まで獄中において、釈放後、運動に戻りました。1998年6月には、活動を外に広げるために、ジャカルタで大規模なデモを行いました。デモによるムーブメントはインドネシア各地に広がりました。1998年12月、ディリに戻り、他の地下活動の人々と協力し、住民投票まで活動を続けました。住民投票直後はインドネシアの弾圧から逃れるため1か月山に逃げていましたが、またディリに戻り人道援助など行いました。

■ 主な Q&A

Q：インドネシアにいた 300 人～400 人の学生のほとんどが RENETIL に参加したのか？

A：必ずしも全員が加わったわけではありません。自分に危険を感じる人は参加しませんでした。地下活動なので、メンバーになるためには、いくつかのステップや規範がありました。口外しないなどの誓いも必要でした。メンバーは普段は普通に生活しているので、メンバーにならなければ誰がメンバーかわかりませんでした。

Q：どのように活動していたのか？

A：小グループにわかれ、それぞれにリーダーがいた。リーダー同士は知っていました。

Q：裏切ったりする人はいなかったのですか？

A：メンバーになるには宣誓の儀式があり、カップに十字架を入れて、ワインを注ぎ、全員で回し飲みをするので、それを裏切ったりすることはできなかった。団結は保たれていた。

Q：どんな活動だったのですか？

A：①インドネシアの学生運動と東ティモール国内の運動との関係作り、②デンパサールの活動を都市部の多いジャワにも広げること、③最終的に東ティモール大学生のすべてに運動を広めること、④海外で活動するグループと RENETIL をつなげること、⑤インドネシア人で自由化・民主化をすすめるグループとの連携、など行った。

RENETIL の活動の成果は、①ディスカッションをしてインドネシアでの活動をすすめ、インドネシア人の中にも理解を得られたこと、②東ティモールの現状を国際社会にひろめたこと、③声明文や発行物などでアムネスティや NGO にアピールしたこと、その国際的な反応を国内指導部へ返すという双方向の活動をしたこと、④在ジャカルタのイギリスやポルトガルなどの大使館へデモをして海外へ訴えたこと、など。また、インドネシアに逃亡した活動家をかきまわって亡命を手伝ったりもしました。

Q：集会やデモをして逮捕される心配はなかったのですか？

A：いつも隠れていたのでは活動はできない。インドネシア政府に目をつけられた人を守る運動もしていました。

photo@Hisayo Arai

<ロビボグループ代表ジュリオさんへのインタビュー>

コカマウグループでのコーヒー収穫について

★ コカマウの組合に加わったきっかけは？

COCAMAU に加盟したのは、近くの集落が加盟して成功したのを見たのがきっかけ。参加出来る道をずっと探していた。自分たちでチェリーを加工していきたいとも考えていたので参加した。

★ コカマウの組合に入って変わったことは？

組合に入る前は、コーヒーをどこに出荷すればいいかに悩んでいた。また、今まで何時間もかけて徒歩でコーヒーを運んでいたが、コカマウが車を出してくれるので、運ぶ仕事などもすごく楽になった。今年からコカマウに参加したので、運営についてもこれから学んでいくつもりだ。

★ フェアトレードについてどう考えていますか？

フェアトレードというよりは、コーヒー協同組合についての意義を考えている。今までは馬で何時間もかけて売りに入っていたのが、今では自分たちで加工をする時間もでき、仕事の意義を感じている。フェアトレードの意義はまだあまり認識していないが、加工までやることは有意義だと感じている。

★ コーヒーの他に何を育てていますか？

豆、大豆、キャベツ、家畜など。収穫は、木曜、日曜はバザーに持って行っているが、野菜はコーヒーの収穫が忙しくて大きな収入源にはならない。米は、高地では作れないため、政府米を買っている。

★ コーヒー生産で1番大変なことは？

何が大変かなどは考えたことがあまりない。(笑顔で) 特に言えるなら、コーヒー豆を運ぶのは重くて大変。

★ コーヒーの収穫について

多い時では1日500キロ(チェリー重量)くらい。収穫は9月まで。加工後のパーチメントを、一人2袋(1袋20キロ)担いで集荷場(車で来れる所)まで運ぶ。パーチメントは自分で運び、チェリーは馬で運ぶ。昔は、馬で運んで1時間半のところまで行っていた。

★ コーヒーの収穫での収入は？

2009年は、1年で1家族500ドルほどだった。これは良い方で、収入は天候に左右される。食費は週20ドル弱で、食料は木曜にマウベシの市場で買う。買うものは、キャベツ、米、塩、砂糖、コンソメ(Masako)、洗濯用の石鹼など。一番の出費は米である。



★ 積み立てている組合費用の使い道について考えていることは？

個人的な意見よりも、みんなで話し合っ決めていたいと思っている。

毎日の仕事について

★ 家庭内での仕事の分担は？

男女どちらも力を合わせて共同作業で働いているが、力のいる仕事は男性、力のいらぬ仕事は女性と役割分担をしている。女性は主に収穫や選別など。子どもは、だいたい 10 歳から子供たちにも仕事が出来ようになるので、10 歳以上はコーヒー生産の作業を手伝っている。収穫の作業は難しく、重労働なのでそれより小さい子はできない。

★ 1日の動きについて

男性→朝5時ぐらゐに起きる。(日が出ると動きだす。) 朝から家畜の世話を済ませ、昼食後からコーヒー、畑作業をする。コーヒー畑には日陰があるので暑いときはコーヒー畑で作業をすることが多い。

女性→男性と同じ時間に起きて、朝食の準備をする。畑作業と家事を交互にしている。ご飯を作るのは女性の仕事になっている。昼食後、掃除をして、タロイモ、キャッサバを収穫。夜食を作り、片づけ後、就寝。

ロビボ村での暮らしについて

★ 土地は誰が所有しているのですか？

コーヒーを生産している土地は世帯ごとに所有している。個人所有で、息子たちが均等に分割する。男性が相続し、女性は結婚後、家を離れる。夫の方が牛を持ってくるので、女性の方が損ということはない。

★ 家はどうやって建てていますか？

作り方を知っている人は自分で、分からない人はできる人に頼んで建てている。

★ 子どもたちの学校は？

学校は歩いて 1 時間ほどのところにあり、月曜から土曜まで授業がある。子供の数が多いので午前組と午後組に分かれている。

★ 携帯電話は使っていますか？

携帯電話はここ 1 年で広まった。Timor Telecom (ティモールの電話会社) が安く携帯を売るキャンペーンを展開したので、1 台 10 ドルで購入できる。村では充電ができないので、マウベシに行った時に充電している。

★ 噛みタバコ(ママ)をするのはどんな時？

お客さんをもてなす時などの習慣である。ママとたばことコーヒーでもてなす。

★ 大切にしていること、楽しみは何ですか？

決まった「休暇」はなく、1年中仕事をする感じだ。コーヒーの収穫が終われば、畑仕事をし、常に仕事をしている。ただ、冠婚葬祭のときに村中が少しお祭りのような感じになる。

★ 教会には行っていますか？

マウベシの教会に日曜日に行く。歩いてほしい1時間半ぐらいかかる。

★ 政治の動き知る手段は？

なかなか情報は回ってこない。情報は都会を行き来する人から得ることがほとんどである。

★ 出稼ぎに行く人はいますか？

出稼ぎに行く人もいるが、その人が実際に、出稼ぎ先で稼いでいるかは分からない。中にはよりよい教育を受けるために都会に行く人もいる。ディリなどの都市に行くとお金がかかるので、仕事がない限りは行かない方がよいと思っている。

★ 日本人を初めて見たときの感想は？

コカマウを通して初めて日本人に会った。これからは一緒に働きながら絆をより深いものにし、子供、孫の世代もずっと繋がってほしいと思う。

★ 結婚はどのようにするのですか？

親同士が連れてきて見合いをする。もし離婚したら早死にするとされている。結婚前には花嫁代償をどれくらいにするか（牛を何頭など）交渉をする。20歳前後で結婚する。結婚後は新居を作る。親と同居はあまりしない。女性は15人くらい出産する。そのうち5人くらいは死亡する。

★ 村の人たちの寿命はどれくらいですか？

平均は60歳くらいである。長寿の人もいる。

（記録：石井さん、熊谷（有）さん、小鳥居さん、編集：伊藤（文））

<マウベシ事務所にて：コカマウ代表者からツアー参加者へ>

★ 日本の方々はこの国にも行ったことがあるのに東ティモールが良いところだと言ってくれてうれしい。

★ 他のコーヒーを輸入しているNGOはPARCICのように対話できるスタッフを送ってこない場合が多かった。

★ PARCIC/日本の方々とはこうやって良い関係を築いてきたので、今後もこれを続けて行きたい。急に関係を断つようなことはしないでほしい。

★ 組合の加盟世帯数は増えて行く予定なので、これからも毎年訪れてほしい。生産者たちも期待している。

特定非営利活動法人 パルシック

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-7-11 東洋ビル

TEL:03-3253-8990 FAX:03-5209-3453

E-mail:office@parcic.org WEB: www.parcic.org